



▲伊藤鉄工株式会社  
伊藤光男代表取締役社長



▶川口鋳物職人の技の証し  
KAWAGUCHI i-mono  
薄肉の鋳物にほうろうをかけるのも大変な技術がいる。取っ手の赤は炎を表す。詳しくは <http://www.ferramica.com> を参照



◀溶けた金属の温度はおおよそ1500℃。火山から流れ出る溶岩よりも熱い

川口商工会議所会頭  
細野 壽雄氏

## まちの解体新書 埼玉県 川口市

第2次世界大戦後はわが国産業の壊滅的な打撃の中で、川口市内の各工場も大きな影響を受けたが、すみやかに生産を民需へシフトすることに成功。折しも需要著しい鍋釜で再出発を図った。戦後10年ほどで工程の機械化を推進し、見事な復興をとげた。

鋳物の砂の焼ける匂いがまちじゅうを包み、腕の立つ職人なら社長と同じくらい稼いで、酒にギャンブルにと大盤振る舞い。「居並ぶ600軒以上の工場。キューボラとよばれる溶解炉などの煙突から火柱が上がり、夜にはまるで花火のようでした」と生粋の川口っ子、細野壽雄川口商工会議所会頭が当時を懐かしむ。

そのころは、鋳物工場に直接かわるだけでもざっと1万6000人。その家族も合わせた市民の約半数が鋳物で生計をたてていた。さらに材料、加工、機械、木型など関連業種を含めるなら市の大多数が鋳物にかかわっていたといえる。これぞまさに「鋳物のまち」、日本の高度経済成長を支えた生粋のものづくりのまちだ。

けれども、バラ色の時代は長くは続かなかつた。下請け業者の多いこの業界は不況の波をまともにくらう。1970年代の石油ショック。円高による受注減。90年代のバブル景気の崩壊。加えて近年は深刻な後継者不足や厳しい公害規制にも追い

の間ですこぶる評価が高い。白米を炊いても、炊飯器とは比較にならないおいしさだという。ただ非常に重く扱いづらいという欠点があった。軽くするために「強度を保ったまま金属の厚みを薄くするのが一番大変でした」。画期的な鋳物鍋の開発という難問に立ち向かったのは伊藤鉄工。その伊藤光男社長から苦労話を伺った。

実は同社の専門は、建築金物やマンホールの蓋。主力商品の一つ、排水用の継ぎ手に用いる薄肉鋳造技術を鍋の軽量化につぎ込んだ。目標は、2mmを切る鍋厚。従来の技術では越えられないこのハードルをクリアするために、研究は材料からの根本的な見直しを必要とした。

多少専門的になるが、鍋の材質は一般にねずみ鋳鉄。これだと2mm厚では十分な強度は得られない。倍以上の強度のダクタイル鋳鉄を使うと、今度はその性質上、薄くすることは極めて難しい。また2mmという狭いすき間の鋳型に溶かした鉄を毎回バラツキなく流し込むのも至難の技。試行錯誤の上、納得のいく製品が出来上がるまでには約3年を費やした。

そうしてついに今年1月、フランスの国際展示会「メゾン・エ・オブジエ」でKAWAGUCHI i-monoの鍋が世界を感嘆させる日がくる。モダンなデザインはもちろん、常識をくつがえす薄さと軽さの

打ちをかけられて、市内の鋳物工場は現在その数わずか100前後にまで減少してしまった。

### 鍋で消費者にも身近に

しかし、この川口をここまで育て上げてきた底力。それはやはり高度な技術に裏打ちされ、たゆまぬ努力を注ぎこんできた鋳造関連業種にほかならない。鋳物は今でも、これからも地域の核であり心臓である。

「現在でも、ものづくりの土壌はしっかりと受け継がれています。『川口っ子』の職人気質もまだまだ健在」と細野会頭は胸を張る。

そんな「鋳物のまち川口」のブランドイメージの向上とさらなる定着を目指し、商工会議所では、3年前より「JAPANブランド育成支援事業」として、新たな技術開発と斬新な製品創出に力を入れてきた。

自動車部品や機械部品、欄干やフェンスなどの分野で川口の製品の実力は圧倒的。しかし最終消費材として一般の消費者にそのインパクトが届かない。そこで長年培った技術を暮らしの中で享受してもらおうと、商工会議所が企業と協力して、再び初心に戻って家庭用の鋳物鍋の開発に着手した。

鋳鉄の調理器具は熱容量が大きく、食材の加熱温度が安定する。特にシチューなど煮込み料理が大変おいしく仕上がるので、プロの料理人にも知らしめるミッションを担う。

### 3輪バイクで技術力をアピール

鋳物関連以外にも、川口は2000ものさまざまな工場がひしめく県下有数の産業集積地。その技術力をアピールするため、商工会議所と地元企業が取り組んだのが、3輪バイク「トライク」の試作だ。

このプロジェクトには、鋳物業、メッキ業、板金業や車両整備をはじめ、デザイン、繊維など種々の会員企業およそ20社が参加して、熱い職人魂をぶつけ合い、現場はさながらものづくり、バイクづくり大好き人間の超異業種交流会といった盛り上がりを見せた。

目指したのはエンジンなど二部の中古部品を除くほとんどを各社が得意の技術とノウハウで作り上げた純オリジナル。フェンダーやタンクの美しいライン。マシンング加工を取り入れたパーツ製作。さびに強く深い光沢を与えるダブルニッケルクロムめっき。専門メーカーにもひけをとらないものにしてしまうと細部まで徹底的にこだわり抜いた。

何もかも初めてのバイクづくりはトライ・アンド・エラーの連続だったが、各社が専門の知恵を出し合い、メンバー一丸となって迫力ある重厚